

日本と欧米の常識の比較

小 林 淑 哉

まえがき

文化は日常茶飯の出来事の中にひそんでいる。民族の文化は、その民族の生活を生み、その民族の生活は、その文化をつくる。文化の本質、彼我の文化の類似点あるいは相違点を探る方法の一つとして、毎日の些末な出来事の中に、その民族の文化の原点、その国の個性がひそんでいる。

ヨーロッパ病と日本病

「イギリス病」という言葉がある。イギリス人が自分の人生、自分の時間、自分の家庭を大事にするが故に、仕事に対する情熱、会社における勤勉さが失われ、その結果、英国全体が社会的にも、経済的にも下降線をたどっていることから、この言葉が生れた。英国に限らずヨーロッパの先進国について、同様のことがいえる。最近では、西独についても「西独病」という言葉が囁かれている。1978年まで貿易収支は黒字続きであったのに、1979年から毎年赤字となった。又、1979年には、西独の観光収支だけでも100億ドルの赤字を越えた。西独病と言われるようになった原因は、1.先端技術の立ちおくれ、2.人口減少傾向、3.労働の質の低下、4.労働協調路線の動揺にあるという。又、労働意識の変化が見られるという。例えば、欠勤率が高くなり、9%に達した。だからフォルクス・ワーゲンの社長、シュムッカー氏は、「欠勤率が日本並みの2%におさまれば、ドイツの車は日本に対抗できる」と言ったそうであり、西独経済相、ラムスドルフ氏は「日本人を見習って働こう」と呼びかけたそうである。

一方、日本人は勤勉であり、自分の人生よりも会社に忠誠を尽くし、仕事をなよりの生き甲斐と考える人が多く、会社のために自殺する社員も少なくない。これが日本の高度経済成長を助けた一因であり、戦後の日本人がこのように働かざるを得なかった理由もある。エズラ・ボーゲル氏のように¹⁾、日本を礼賛する人もいるが、「日本人は、ウサギ小屋とさして変らない住宅に住む、働き気ちがい」と難詰されたりするし、「日本病」という言葉も生れてきた。トケイヤー氏は次のように述べている²⁾。

イギリス病は量的な病気である。イギリスがもはや量的なものを解決できなくなっていたのが、イギリス病の大きな原因である。

斜陽のイギリスに対して、日本は戦後、“GNP”（国民総生産）の太陽が昇る国”（Land of the rising G.N.P.）といわれてきた。事実、日本人の物質的な生活は一変した。

しかし、イギリス人はまだ個人生活においては質を尊んでいる。だが、日本病は質的な病気である。今日の日本人は量を求めるが、質を尊ばなくなっている。眼に見えるものは尊ぶが、見えないものはないがしろにする。個人生活における本当の質が何かということを考えようとしなない。

ヨーロッパやイギリスに駐在した日本の商社マンの中で、このようなヨーロッパ病に取り憑かれた日本人は、日本の本社にもどってきても重要なポストにつくことはできないし、「もう使いものにならない」というレッテルを貼られることさえあるのに対して、勇ましい日本病をあくまでかかえて帰国した日本人は、本社でも大事にされるという話も聞く。

ヨーロッパ病にかかった日本人を、古い日本語で表現するとすれば「世捨て人」ということになりはしないか。ヨーロッパ病にかかった日本人は、現代ならば、会社をやめて、他の仕事にいくらでもつくことができる。すなわち、その人は会社に忠実ではなくして、人生に忠実に、正直に生きようとしているのである。

しかし、昔日本で、自分の職を辞して人生に忠実に、正直に生きる道は狭かった。西行法師は地位・名誉等、社会のしがらみにわずらわされて、人生を無為に過ごすには忍びなかった。西行法師は自分の人生を豊かに、大事に生きたかったのであろう。そのために当時としては出家する以外に道はなかったのに違いない。彼はヨーロッパ病にかかった日本人かも知れない。世捨て人どころか、その時から彼の本当の人生が始まったと言える。次の歌はその心を歌ったように思える。

世をすつる人はまことにすつるかはすてぬ人こそすつるなりけり

惜むとて惜まれぬべき此の世かは身を捨ててこそ身をも助けめ

交通信号

交通信号のある横断歩道で、欧米人は、信号が赤であっても、左右から走ってくる

車の姿が見えないことを確認しさえすれば、歩行者はどしどし横断するのが常識である。交通信号は、交通渋滞をなくすためにあるのだが、先ずなによりも歩行者の安全のためにあるのであって、車のためにあるのではない。信号が機械的に赤になっているからと言って、それに盲従することは、人間尊重の精神に欠けることになると思う。だから警官も文句は言わない。ただし欧米では、車よりも歩行者が優先、大型車より小型車が優先というルールが徹底しているから、こういうことが可能なのである。欧米ではダンプ、トラック等の大型車の運転手が常に小型車に気を使ってくれるのが心にくい。法律のきびしい社会主義国でも、赤信号を無視する歩行者は少ない。しかし、南ヨーロッパでは歩行者尊重の精神が稀薄になるので信号無視は控えた方がよい。トルコ、アラブ諸国、中米などでは、歩行者が赤信号を無視するが、欧米人の考え方とは全く違う。彼等はでたらめで無謀で危険この上ない。

日本人は、信号が赤の時には、車が通っていなくても横断しない。そういう横断があった場合、日本の警官はそれを認めない。日本の警官は世界で一番厳格といえるだろう。同時に日本では、車より歩行者優先、大型車より小型車優先という観念が国民に浸透していないので、信号無視は危険が多い。信号にこれほど忠実な日本でさえも、「赤信号、みんなで渡ればこわくない」という言葉が横行しているのは、興味深いことである。この言葉には日本の国情と国民性の一端が如実に示されているからである。すなわち、「赤信号をこんなに厳守する国は世界のどこにもない、そういう国情の日本でありながら、日本人には集団主義という国民性があるから、そのおかげで、恐ろしい信号無視を平気でやってのける」という意味をこの言葉は含んでいるのである。ポール・ボネ氏は次のように言う³⁾。

もしも、パリやニューヨークで、赤信号の時に横断する歩行者を取り締まったら警官が何万人いても足りない。

信号機というのは、自動車交通の規制のために発明されたもので、歩行者は安全さえ確認すれば、信号に従う必要がないというのがフランス人の考え方である。したがって、パリやニューヨークでは、車とどぎれると赤信号でもいっせいに歩行者の横断が行なわれる。そういう歩行者の自由を、たかが機械にすぎない信号機が奪うのはせんえつ、かつファッショだという考えが、フランス人の心の根底にある。そういうフランス人から見ると、信号に従ってピタリと歩みを止める日本人の姿はむしろ異様である。

喫 煙

1963年、私はバスでアメリカを旅しながら、各地の中学、高校、大学を二十数校視察した。大学はそれ程でもないが、中学、高校では教員、職員が煙草を喫っているのを見かけたことはないし、執務室のどこにも灰皿が見当らない。数校目の学校を訪れたとき、はじめて講師室に案内された。その部屋のドアを開けた途端、もうもうと煙草の煙が流れてきた。この学校では、この部屋でしか煙草が喫えないのだそうである。次の学校で煙草を喫える場所を聞いてみた。ここでも一ヶ所だった。便所の隣りの殺風景な休憩室に灰皿が置いてあって、数人の教員がしょんぼりと喫っていた。アメリカは、学校に限らず、社会のいたるところで、喫煙の権利が大幅に制限されていて、喫煙者には肩身の狭い世界であるのに、日本は喫煙者横暴の世界である。

ヨーロッパでは、喫煙者はアメリカ程虐待されてはいない。例えば、ヨーロッパの鉄道に乗ると、喫煙の権利が守られていると同時に、嫌煙の権利も平等に守られていることに気がつく。確実に赤字とわかるローカル線でさえも、一等室、二等室のついている車両ばかりか、喫煙室と禁煙室がわかれている車両が必ず連結されている。ただでさえ赤字と思えるヨーロッパの鉄道が、このような大きな負担を敢えて背負っているところに、ヨーロッパの常識を垣間見ることができる。喫煙・禁煙に関するこのようなものの考え方は、当然のことながら東欧でも殆んど踏襲されている。

親 切

アスファルト・ジャングルという言葉からも察せられるように、都会では、東京でも、ニューヨークでも、モスクワでも、冷酷な人間関係が次第に増大して行く。すれ違う人と人との間には、人間疎外がはびこり、他人の困惑や不幸を見て見ぬふりをして通り過ぎるという事態も少なくない。それでも、欧米の都会に住み、又は旅をして、思わぬ親切を受けることは誰でも経験することである。ましてや、地方都市や山村では、カリフォルニアの山の中で、ウズベクの村で、トルコの田舎で、日本の東北地方で、見知らぬ人から言葉をかけられ、暖かい思いやりを受け、見かけぬ異民族への警戒心などひとかけらもなく、胸を開いて語りかけようとする暖かいまなざしを感じることが多い。

どこの民族にも、人情とか親切、そしてそれに対する義理とか感謝の心はひそんでいる。しかしその心を分析する時、少くとも欧米と日本を比べると、微妙な相違点を発見することができる。欧米では親切とお返しをはっきり切り離して考えることが多

いが、日本では親切とお返しを重ねたり、からませたりすることが多い。又、欧米ではみうちにも他人にも分け隔てなく親切を施す傾向が強いが、日本では他人よりみうちに、遠い関係の人より近い関係の人に親切を施す傾向が強い。欧米では親切を取り引きの道具に供することは少くて、親切とビジネス（利益）を切り離すが、日本では社長が従業員の仲人を買って出て社長と従業員の協力関係を緊密に保とうとしたり、上役と部下が奢ったり奢られたりして共に飲んで仕事を円滑に進める手段としたり、中元、お才暮で日頃の交際を深めて後々のビジネスに役立てるといような例に見るように、親切とビジネスが切り離せないことが少なくない。その結果、日本では、親切の見返りがないと、「あいつは恩知らず」のレッテルを貼り、親切の見返りを暗にほめかされると、「恩きせがましい」とか「親切ごかし」という言葉が生れ、素直に親切を親切としてだけ受けとめると、「あいつは腹のうちも読めない世間知らず」とののしられることにもなる。

世界のどの民族も、親切にした相手から感謝されるのは嬉しいし、受けた親切に感謝するのが礼儀である。ただ、欧米では、キリスト教思想が浸透していて、社会に対し、他人に対して、無報酬の奉仕を大切にするから、相手から見返りを期待しない。ただし、ビジネス（取り引き）となれば、give and take であって、見返りを堂々と要求もする。言わず語らずの中に、相手に見返りを要求するわけでもないし、「袖の下」を要求するということも少ないわけである。それに対して日本では、本来の「恩⁹¹」の観念、「義理人情⁹²」の観念が悪用され、ひいては「タテ社会⁹³」、「仲間意識⁹⁴」、「集団主義⁹⁵」の思想が手伝って、見返りを期待する親切、より近い関係の人への親切が少なくないのである。

金銭感覚

1978年の調査によれば、個人が持っている金（gold）の保有量は、フランスが6,221トン、インドが3,732トン、米国が3,266トン、日本が250トンである。数年前に比べれば、日本人も金を所有するようになったといえるが、諸外国に比べれば、まだまだ金に対する関心は薄い。

ヨーロッパを歩いて気づくのだが、鉄道の殆ど駅の駅には外貨交換所があり、町のいたるところにも見かける。ヨーロッパには小さい国が多くて、観光客が沢山くるからでもあるが、毎日の生活の中で、ヨーロッパの人々が仕事のためにも、ちょっとした旅にもいくつかの国を渡り歩かなければならないからである。

例えば、フランス人は自分の財産の三分の一をフランス・フランで、三分の一をフ

ランス以外の外貨で、残りの三分の一を貴金属で持っていると言われる。それは長い歴史の中で培われた生活の知恵である。すなわち、自分の国の貨幣価値がいつ暴落するかわからない。いや暴落はしないにしても、その日その日の為替レートの上り下りで得をしたり損をすることが眼に見えている。だから、その日、その月、その年の分のよい、又は安定した外貨を持っていることが蓄財又は利殖に役立つわけである。従ってヨーロッパの人々は毎日の為替レートに常に注目せざるを得ない。

同時に、ヨーロッパ人は、もし戦乱に巻き込まれて貨幣が反古同然になったとき、頼りになるのは貴金属だと考える。それはインド支那の難民が最後まで身につけていたものは貴金属だったという最近の例を見てもわかる。ヨーロッパの人々はそのような最悪の事態を実感として、いつも念頭に置いているのである。だからヨーロッパでは、商売人でなくとも、為替レート、金、宝石に関心を持つのが常識になっている。日本人もそろそろ金や宝石に関心を持ち始めたが、ヨーロッパの人々に比べれば雲泥の差がある。ましてや為替レートについての関心は、外国に旅をする人以外には皆無ともいえる。

大体、日本では、カネを卑しいものとする観念を江戸時代に植えつけられて以来、タテマエではカネを軽蔑しながら、「袖の下」とか「賄賂」という形で、ホンネではカネに執着していた。第二次大戦以後、日本人は金銭について戦前に比べれば、おおらかでドライになった。それどころか、日本人は物と金だけに明け暮れて、金のための仕事が人生の生き甲斐と考える傾向が強くなった。トケイヤー氏の言葉をかりれば、「今日の日本では、経済は絶対的な善であり、精神は悪とされている。見えるものはよくて、見えないものは価値がないというのだ。誰にとっても、経済的なものさしだけがものをいう社会なのである²⁾」。しかしこんなに変わったように見える日本人にも、江戸時代から現在にいたる迄、変らない習慣がひそんでいる。それは、「顔をたてる³⁾」、「みえをはる⁴⁾」という国民性から、日本人が酒場やレストランで勘定する時に、明細書を丹念にチェックしようとはせず、貰った釣銭を逐一計算することも少ない。日本で、入念に勘定書や釣銭をチェックしようものなら、店員に「みみっちい客だ」とせせら笑われることにもなりかねない。多くの日本人が外国へ行ってもその習慣を改めないで、観光客相手のバー、レストラン、ホテルなどのレジ係は、日本人の心理を最近知り始めて、日本人を馬鹿にしたり、誤問化したりすることが北ヨーロッパでも多くなってきた。

謝まる民族と謝らない民族

女優の岸恵子氏は、フランスでの長い生活の中で、どうしても彼女には我慢のならない、同時にフランスになじめなかったことがあると言う。それは、彼女の自宅で雇っていたメイドが庭で水を撒いていた時のことである。彼女が庭にさしかかったとき、そのメイドが後ろに注意をしないで急に方向を変えて水を撒いたために、彼女は水をかぶってしまった。日本人同士なら互いに謝って、なごやかに事はおさまるところなのに、メイドは彼女に、そんなところに急に現れるからだと言って謝ろうとするどころか、^{イタケダカ}居丈高に彼女を詰った^{ナジ}というのである。

岸氏の反応は日本人ならば必ずと言ってよい程の、又本能的と言ってよい程の感覚である。それ程日本人は謝ることを習慣とする民族である。ところがこの地球上に謝まる民族は殆んどないと言える。稲村博氏は次のように述べている¹⁰⁾。

何かにつけ絶対に自分の非を認めず謝らないというのも各国によく共通している。これは使用人とは限らず、ほとんどあらゆる人にいえることで、先進国でもほぼ同じである。明らかに自分に落度がある場合でも、絶対謝らぬばかりか、あれこれと巧みな言い訳をして他の責任に転嫁する。例えば、会社の従業員が遅刻したような時には、本人は必ず理由づけをして、途中のバスが故障したとか、停電になった、家族が病気になったなど、嘘だか本当だかわからないようなことをいう。それなら電話でなぜ知らせぬかとただすと、かけたが通じなかったなど実にすらすらと次々にいい逃れをする。日本人から見るとまさに天才的であるが、小さい時から一種の習慣になっているのだから当然である。

それでは一体、このような謝る民族と謝らない民族を生み出した原因はなんであろうか。本多勝一氏は次のように述べている¹¹⁾。

自分の失敗を認めること、それは無条件降伏を意味する。そんなことをしたら「人間はすべて信用できない」(Q氏)のだから、何をされようと文句はいえない。かつてアラビア北部まで攻めこんだこともあるモンゴル軍は、たとえばロシアに侵入したとき、生命を助けてくれれば降伏すると申し出た敵軍に対し、誓約をもってこれに応じたが、いざ降伏してくるや否や、一人残らず殺してしまった。とくにキエフ侯ら三人の貴族に対しては、その死体の上に板を敷いて祝宴会場にした(そう

いえば、かれらも遊牧民の出身か)。ペルシャのメラガ(テヘランの西北西約500キロ)を攻略したときは、全住民を虐殺したが、まだ生き残りがいるらしかったので、捕虜に命じて「モンゴル軍はもう退却したぞ」と叫んで歩かせ、だまされて出てきた者を片端から殺した。虐殺がすんだあとムタウワにお祈りの呼びかけをさせて、これでやっと安心して出てきた信者を次々と殺したため、全市民のうち生存わずか五、六人となったこともある(メルヴ市)。ヘラト市(今のアフガニスタン西部)が陥落したときは、160万人の市民の殺人作業が終るのに全蒙古兵が一週間かかったという。160万という数字(ドーソン『蒙古史』)は多すぎるが、こういうやり方はアウシュヴィッツやヒロシマを思い出させる。とにかくだまされたら命がないのだから人間は絶対に信用してはいけない。また、たとえ何か失敗しても、断じてそれを認めてはいかんのだ。100円のサラを割っても、もし過失を認めたら、相手がベドウィンなら弁償金を1,000円要求するかもしれない。だからサラを割ったアラブはいう——「このサラは今日割れる運命にあった。おれの意志と関係ない」。

さて、逆の場合を考えてみよう。サラを割った日本人なら、直ちにいうに違いない——「まことにすみません」。ていねいな人は、さらに「私の責任です」などと追加するだろう。それが美德なのだ。しかし、この美德は、世界に通用する美德ではない。まずアラビア人は正反対。インドもアラビアに近いだろう。フランスだと「イタリアのサラならもっと丈夫だ」というようなことをいうだろう。

私自身の体験ではせますぎるので、多くの知人・友人または本から、このような「過失に対する反応」の例を採集した結果、どうも大変なことになった。世界の主な国で、サラを割って直ちにあやまる習性のあるところは、まことに少ない。「私の責任です」などとまでいってしまうお人好しは、まずほとんどない。日本とアラビアとを正反対の両極とすると、ヨーロッパ諸国は真中よりもずっとアラビア寄りである。隣りの中国でさえ、サラを割ってあやまる例なんぞ絶無に近い。ただしヨーロッパでは自分の弁償するほどの事件になりそうもないささいなこと(体にさわった、ゲップをした、など)である限り「すみません」を日本人よりも軽くいう。この謝罪は、ベドウィンの「親切」のように、単なる慣習である。単なる慣習だからこそ、社会をスムーズに動かす潤滑油として大切なのだ。

さて、白人はこれをどう見るのだろうか。グレゴリー・クラーク氏の意見に耳を傾けてみよう⁸⁾。

謝れば許してもらえるというもの、甘えの構造の一部である。当局者が相当重大な交通違反やその他の法律違反に対しても謝罪状一本で一件落着させているのを見て、外国人はいつも驚いている。同じことは、われわれ外国人に対して日本人が不都合を働いたときにも言えるのであって、日本人は通り一遍の陳謝をするだけで、あとはわれわれが水に流すものと考えている。これらのことは、迷惑をかけた相手に対する「甘え」のしからしむところである。迷惑を蒙った側は、親のような度量を示すべきことになっている。

騒 音

ミュンヘンの目抜通りを歩いても、機械音（スピーカーの音）や騒音は一切聞えてこない。スピーカーを使わないで、バイオリンやアコーディオンの辻音楽師、合唱や辻説法の声は聞えてくる。酒場やビヤホールの室内で、がらがら音楽を奏でることはあっても、街では聞えない。ましてや、大きなスピーカー音を出して走り廻る車など、どこにも見られない。ごく稀にあっても、地方の町で、ある特別な行事に限られている。ヨーロッパの友人に聞くと、騒音に対しては、それを禁止する法律があるし、第一に町の住民が黙ってはいないという。

日本では騒音やスピーカーの音がないのは、寂れた町と考えられたり、不景気な証拠と思われるのが関の山である。選挙演説の宣伝カーや防犯を町民に呼びかける警察署の飛行機利用にいたっては驚く他はない。どこの民族もお祭りと酒と音楽は好きではあっても日本人の騒音好きと少し趣を異にしている。禅宗、わび、さび、茶の湯、活花を通じて、静寂を大切にしていた日本人にはもうもどれないのであろうか。ヨーロッパ人の騒音嫌いについて稲村博氏は次のように述べている¹⁰⁾。

やはりある駐在員夫人の話であるが、この主婦は近頃いささかノイローゼ気味になっている。その理由は、階下に住む大家さんからしょっちゅう騒音についての注意を受けるからである。子どもを泣かせるなどか、家の中で子どもを走らせるな、歌を歌うな、テレビは低音にしろ、等々である。自分らとしては、いわれなくても充分気を付けているつもりなのだが、まるで耳をそばだててこっちの動静をうかがってるのではないかと思うほど敏感である。また一度などは、みそ汁をつくっていたところ、醜悪な臭いをたてないで欲しいと上の階からねじ込まれた。たまにはみそ汁がたべたいのに、これでは全く無理というほかない。あまりあれこれいわれるので、腹がたったから、日本人を入居させるからには日本の習慣は認めるべきだと

抗議してやった。ところが大家は、「日本人は入居させたが、騒音や悪臭まで入居させたつもりはない」と反発した。テキながら名言を吐くと感心はしたが……

白人はおしなべて騒音、悪臭、醜さに対して過敏で嫌悪の情が強いが、著者のみるところ、その中にも人種的な差がいろいろとある。

飲 酒

どこの国にも、その国独特の酒があるといえる。人間と酒とは切れない縁である。日本では「酒を飲む時ぐらいい勝手に振舞って、羽目をはずしたい」と考えるのは、「甘え」という日本人の国民性からであろう。そして「人間というものは酒に溺れるものだ」と考えるのが日本人の通念である。だから「人間が悪いのではなくて、酒が悪いのだ」と解釈して、飲酒運転は日本の法律では禁止されている。酒の上での口論、喧嘩、無礼は翌日謝れば許されるのが一般の習慣である。酒については、日本人と同じ習慣の民族も世界にはいろいろいる。ドイツ人も南ヨーロッパの人々も日本人に似て、乱痴気騒ぎ、喧嘩、口論も少くない。しかし欧米では、ドイツ、南欧を含めて、飲酒運転は禁止されていない。酒に左右されない人間の自律性・主体性を信じているからである。酒の上の無礼、喧嘩も許されるというわけにはいかない。酒を飲んでも飲まなくても、自動車事故を起せば厳罰に処せられるだけのことである。ポール・ボネ氏は次のように述べている³⁾。

中でも、私たちがビックリもし、困惑もしているのは、飲酒運転の規制である。

食事には酒がつきものと考えているラテン系の民族にとっては、酒気を帯びて運転することをいっさい禁じている日本の法律はまことに痛しかゆしである。

ことに昼食のあとが困る。通常のフランス人ならば、昼食時に二人でワインの大ビンを一本空けるのは常識であるが、ワイン半本という飲酒量は、例の風船をふくらますと確実に免許証をとりあげられる量なのである。……中略……

フランスでもアメリカでも、泥酔運転がパトカーなどでも発見されると処罰されるけれども、日本のように、走ってくる自家用車を片っ端から止めて、飲酒の検査をするということはない。……中略……飲酒運転のすえに、人身事故を起こしたりするのは弁護の余地がない。

しかし、成人の男子が、パーティの席上や、食事時に適量の飲酒を行なうのは自然であり、またその成人男子が自分の車を自分で運転するのも、自動車文明の時代にはやむをえぬことである。それを根絶する法律が、さしたる疑問なしに通り、市

日本と欧米の常識の比較

民が異を唱えぬというのも、私たちにいわせれば、異様なことである。……中略……

しかも、飲酒運転に対する取締まりが著しくきびしいのに対して、泥酔に対する一般的な寛容は目を見張るものがある。盛り場の路上で“コモノヤ”を開店している酔客は至るところで見られるし、酔って他人にからんでいる人間も少なくない。

フランス人は酒好きが多いけれども、泥酔することは大変な恥だと考えている。まれに街で見かける泥酔者に対する世間の目もきわめてきびしく、ときには人間失格者の扱いさえ受ける。つまり、自分で自分を律することのできない者は社会人として失格者だと見られるのである。

参 考 文 献

- 1) Ezra Vogel: Japan As Number One.
- 2) M・トケイヤー：日本病について——蝕まれた国の診断書（加瀬英明訳）
- 3) ボール・ボネ：不思議の国ニッポン（ダイヤモンド社発行）
- 4) 中林伸浩：恩の観念と親子関係（研究社発行 講座・比較文化 第六巻「日本人の社会」）
- 5) 源 了圓：義理と人情（中公新書）
- 6) 中根千枝：タテ社会の人間関係（講談社現代新書）
- 7) 米山俊直：日本人の仲間意識（講談社現代新書）
- 8) グレゴリー・クラーク：日本人——ユニークさの源泉（村松増美訳 サイマル出版会発行）
- 9) 井上忠司：「世間体」の構造——社会心理史への試み（NHKブックス）
- 10) 稲村 博：日本人の海外不適應（NHKブックス）
- 11) 本多勝一：極限の民族

（こばやし よしや 本学助教授 英語）